

# 感動新聞

平成23年1月号 発行者 細川栄一

皆様、明けましておめでとうございます！ 本年もよろしく願い申し上げます。

ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

参考著書「共感企業 ビジネス 2.0のビジョン」阪本啓一 日本経済新聞出版社 福沢諭吉「福翁自伝」岩波文庫

## 幕末・維新と同じ空気感

現在は幕末・維新と同じ時代感覚、意識、現象がある。

非連続、価値観の崩壊、予想もつかない事件の発生。

幕末維新に活躍した人たちはみんな若かった。

坂本龍馬、岩崎弥太郎、吉田松陰、桂小五郎、西郷隆盛、渋沢栄一・・・。

みんな、青年だった。吉田松陰が亡くなったのは29歳2ヶ月の時だ。

既に「松陰先生」と多くの門人たちから慕われていたところは驚異である。

青年だった彼らが持っていた情報量はおそらく現代に置き換えると、幼稚園程度しかなかったのではないか。

PCも携帯もネットもない。検索など思いもよらない。本そのものが貴重品だった。

福沢諭吉の「福翁自伝」には緒方洪庵の適塾塾生が貴重な洋書の150ページあまりを2泊3日のうちに、30人総出にて交替で筆写したエピソードが紹介されている。筑前国主黒田美濃守という大名から借り受けた貴重なオランダ語の本（当時の金額で80両、現在の貨幣価値で約500万円）で、返却する時には「私共はその原書を撫でくりまわし誠に親に暇乞いをするように」別れを惜しんだそうだ。今なら考えられないことだが、それだけ本というものは貴重なものだった。

それでも幕末維新の青年たちは大きな仕事を成し遂げた。

なぜか？

彼らに共通していたのは**高い志**だ。

今、私たちから学ぶべきは、**高い志**だ。

## 福沢青年の志

福沢諭吉は数え25歳（1,958年）の時に大阪から江戸に出てきた。

蘭学とオランダ語には自信があった。「大阪の書生は修行するために江戸に行くのではない。行けば教えに行くのだという自負心があった」

げんに、江戸に到着してすぐに蘭学塾を開いている。これが後の慶応義塾の起源だ。

翌年（26歳）のある日、横浜に行き、ショックを受ける。

目にする看板や瓶のラベルすら、読めない。

居留地にあるオランダ語の通じるドイツ人の商店で筆談しているうち、どうやらこれら意味不明の言葉は英語やフランス語だとわかる。

これからの新しい時代は英語を使えないと渡っていけないようだ。

しかし、ほんの今日、横浜に向けて出かける瞬間までオランダ語と蘭学で世に立とうと考えていた。

横浜から江戸の下宿に戻って疲労困憊したのは、足の疲れではない。

落胆である。

この時の気持ちを諭吉はこう述べている。

横浜から帰って、私は足の疲れではない、実に落胆してしまった。

これはこれはどうも仕方がない。今まで死に物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した。その勉強したものが、今は何もならない。商売人の看板を見ても読むことが出来ない。さりとは誠に詰まらぬことをしたわいと、実に落胆してしまった。けれども決して落胆していられる場合ではない。あすこに行われている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。ところで今、世界に英語の普通に行われているということはかねて知っている。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければとても何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰った翌日だ。

一度は落胆したが同時にまた新たに志を發して、それから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、さてその英語を学ぶということについてどうしていいか取付端がない。

注目したいのは、「落胆したが同時にまた**新たに志を発して**」である。

### **本学と末学**

幕末維新の青年たちと現代の私たちとの知的方面における違いは、四書五経（論語、大学、中庸、孟子、易経、書経、詩経、礼記、春秋）をしっかりと勉強し、内化していたことである。

学問には本学と末学がある。

木でいう根が本、枝が末だ。

地面から表に出ている木の幹や枝ばかりに目がいくが、それらを支える地中の根がある。

ちょうど地面を軸にして、表に出ているものと地中に根とは対称形をしている。

立派な枝ぶりにしたければ、根を育てる必要がある。

根を立派に育てるためには土壌を豊かにしなければならない。

知的土壌を豊かにするためには本となる本学をしっかりと学ぶ必要がある。

本学とは徳性を磨く学問だ。

論語など本学を繰り返し読み、考え、行動に移すことで自分の身体へ内化される。

二宮尊徳が薪を背負いながら読んだ本は「大学」だった。

渋沢栄一は生涯「論語」を座右の書として経営に生かした。

ちなみに末学とはハウツーものや「こうすれば簡単に儲かる！」といった情報商材系の本のことを指す。不要とは言わないが、末学ばかり読んでいると栄養失調になる。

### **本学を磨くのは個人のあり方（being）だ。**

「あり方（being）」とは、私が私であることの存在そのものだ。

そのあり方によって、表面上の仕事とその成果に影響が及ぶ。

**吉田松陰に「内に思ふことある者は、外に感じ易し」という言葉がある。**

あり方について考えることは、

「何のために働くのか」という仕事の動機への根本的な自問へとつながる。

仕事の不満は否定的不満と肯定的不満の二種類がある。

否定的不満は給料が安い、休みが少ない、上司が気に入らない、仕事がつらい、といった内容。

肯定的不満はもっと自分にふさわしい仕事があるのではないかと、組織目標はかくあるべきなど。

私は「もっと！もっと！」何かできるはずだと思っていた。

独立し、経営者となった今でも、この肯定的不満足を持ち続けている。

このメンタリティの底に何があるのだろうかという自己分析してみると、生計のための仕事と喜びのための仕事の二種類があって、私は仕事を喜びのためにする「クセ」があることがわかった。

大学にある「徳は本なり、財は末なり」というフレーズに触れると、深く納得する。

つまり、私がなぜ働くのかというと「自らの中にある『仕事を通じてもっと喜びを得たい』という欲求のため」ということになる。

すると、何か新しい世界が見えてくるのではないかと。

何か面白そうなことがあるのではないかと。